○研究あれこれ

中世奈良と山水河原者

山　村　雅　史

寛正 4（1463）年 7 月 13 日、興福寺大乗院門跡尋尊は京上の折り、河原者善阿弥を宿所に招いて作庭を依頼した。善阿弥は、室町幕府八代将軍足利義政が寵愛する今をときめく作庭家であり、すでにこの頃 78 才の高齢にもかかわらず、当代随一との評判は衰えていない。ただ、さすがに体の弱りは隠せず、三年前からしばしば病臥し、この時もつい一月前の病気からやっと回復したばかりであった。

こうした善阿弥の体のようすと、義政の年内南都下向の予定も考えて、尋尊は、この時期に大乗院の庭を、善阿弥の手で立派なものにしておきたかったのであろう。宝徳 3（1451）年、徳政一揆の飛火によって門跡居住の殿舎・堂塔・園池の大半を焼失して以来、その復興は尋尊の生涯をかけた事業となっていたのであった。

この後善阿弥はたびたび奈良町を訪れ、大乗院の庭園を整備している。寛正 6（1465）年には一乗院門跡の庭の整備にもかかわっているし、文明 3（1471）年には、徒弟 11 人を引き連れて、興福寺中院の庭作りも大規模に行っている。文明 3 年の造営は、7 月 4 日から 10 月 3 日までの長期滞在をともなうものであり、そのためにわざわざ興福寺は、善阿弥の宿所を大乗院庭園のすぐ南の公納堂の東に築造した。

中世の河原者は町外にその居所を構えなければならなかったと言われているが、この例からわかるようにそれは間違いである。文明 2（1470）年に京都一条家から避難してきた河原者次郎の居所も、公納堂東に存在していたのである。河原者は、その職能の関係から河原に住むことが多かったにしても、差別のために条件の悪い所に住まざるを得なかったなどということは一般的になかったと考えてよい。

その後、尋尊は、善阿弥の跡を継いだ子小四郎を、文明 10（1478）年に京都から招いて大乗院の東向庭の作庭を依頼している。翌年小四郎は、現在の高取町付近を本拠にしていた有力土豪越智氏にも招かれている。このようにして、東山文化の一翼を担ったこれらの河原者の足跡は、確実に当時の大和に刻まれ、東山文化の香りを奈良町にももたらしたに違いない。

その一方、京都の義政の庭園熱はとどまるところを知らず、東山山荘造営のために、大和にも庭木の徴発を盛んにおこなうようになった。庭木徴発に派遣されていた河原者たちは、その強引さのために興福寺の講衆・六方衆の反発を買い、奈良の宿所を攻められかける憂き目を見たのであった。

ところで、上記のように善阿弥等の河原者と関係が深い名勝旧大乗院庭園は、現在、平成 7 年度から 6 年がかりで発掘・復元整備されている途中であり、新設された庭園文化館からその様子を見ることができる。尋尊の日記には、文明 6（1474）年 4 月末からも大規模な普請がおこなわれたことが記されているので、今となっては正確に善阿弥の庭を復元することは難しいだろうが、彼がかかわった名園の雰囲気を伺うことはできる。

それはさておき、上記のように河原者は、呪術面も含めて築庭の特殊な技能を持ち、善阿弥の孫の又四郎の言で知られるように陰陽道にまで通じる者もおり、他にもさまざまなキヨメの職能をもっていたことは間違いない。

なるほど、又四郎が「屠家に生まれしを悲しむ」という言葉で表現したように、中世河原者は、被差別の立場にあったことも確かである。しかし、その集団は、被差別の立場と密接な関連をもって、他の人々がなしえない、呪術に彩られた職能を有して、確実に社会で独自の位置を占めていた。中世河原者を考えるとき、単に被差別の側面だけではなく、その存在の総体を丸ごと理解する必要がある。

（史料調査委員会調査研究員）